



Title	定家筆の私家集切：遍昭集・興風集・貫之集・恵慶集・高光集・長能集について
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	詞林. 1987, 1, p. 48-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67238
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

定家筆の私家集切

——遍昭集・興風集・貫之集・惠慶集・高光集・長能集について——

伊井春樹

古典文学における定家の果たした役割というのは、いまさら述べるまでもなく偉大なものがあり、またその方面からの研究もさまざまなされている。しかし、それは現存する作品に關してであり、また書写した伝本や他の書写本に付された識語とか諸記録等からの考察がもつばらで、トータルとしての古筆切には及んでいない。定家は、その生涯においてどれほどの古典を書写したり校合したのか、それは膨大な量が予想されるが、その具体的な冊子本以外の資料として、ここに古筆切を取り上げる。一部はすでに明らかにされているが、なお丹念に収拾して行くと、諸記録からもまったくうかがい知れなかった定家筆の作品がいかに多いことか、あらためて驚かすにはおれない。ただ、すべての断簡を示すことはできないので、ここでは私家集を対象とする。

定家筆の私家集切は、主なものについてすでに指摘したことがあるが（「古筆切・古筆手鑑の世界」「解釈と鑑賞」昭和六一年六月号）、その後も新たな資料を見いだすなど、今後も調査の進展によって改訂する必要がある。以下、私家集大成本の所収順に従い配列していくことにする。作品名の頭に（1—20）とするのは、「1」

は「私家集大成」の巻数、「20」は所収作品番号を意味し、つぎの（47—54）は歌番号を示す。また、歌の後にそれぞれの出典を掲げた。なお、量的な問題もあるので、ここではサブタイトルに記した作品を扱うことにする。

一 1—20 遍昭集 II

47—54

仁和御時八十賀たまふに

かくしつゝとにもかくにもなからへて

きみかやちよにあふよしも哉

今さらに我はかへらしきみつゝ

よへときかすゝはゝこたへよ

しかよりかへりける女どもの花山に

いりてふちの花のもとによりて

みければ

よそにみてかへらむ人にふちの花

はひまつはれよえたはおるとも

こめやとは思ものからひくらしの
なくゆふかけはたちまたれける
いましはとわひにしものをさゝかにの
衣にかゝり我をたのむる

いましはと思物からわすれつゝ

またるゝことのまたやまぬかな

あふみのみやす所けしきありて
人のいひけるころ山に侍けるに

みやす所のもとに

あふみてふ君はたかしまたてれとも

いつらはこゝにくる本のさと

とのたまへるに

なに許ふかくもいらすあしひきの

ひえをと山とおもふはかりそ

「神野家並某家所蔵品入札立目録」(名古屋) 昭和八年六月

二十日

遍昭集は、大きくは〔1〕西本願寺本三十六集系統本(歌数三三首、連歌二句)と、〔2〕書院部御所本三十六人集(五三首と連歌二句)の二類に分かれ、前者に二首増補したのが正保版本である。後者の第二類本は今のところ書院部本が知られるだけだが、ただこの伝本は、第一類本の後に古今集などから二〇首の歌を増補した体裁になっている。このように、第一類本が本来の姿であり、それに伝称歌も含めて、未収載歌を一括巻末に加えたのが第二類本ということになる。

書院部本は、巻末に、

此二牧者字喜多宰相依／所望進之也、

文禄三(甲午)七月八日羽林郎藤判

と記され、宇喜多秀家のために冷泉為満が文禄三年(一五九四)に書写した伝本と知られる。「此二牧」は「巻」の誤字か(橋本不美男説)に従うと、もとは巻子本として伝来していたというのである。書院部本の、流布本に二〇首を付加した形態はいづ頃成立したのか、右の識語が唯一の手がかりだが、これでは室町末期をどこまで遡るのか判断のしようがない。

ところで、右に定家筆遍昭集切を示したように、これは四七から五四番歌までの八首で、第二類本の末尾に相当する。書院部本の為満筆本と、漢字と仮名の違いはあるが、本文はまったく一致する。ただ、定家筆では、下句の二行目を一字下げて書写する。このことから、第二類本は、すくなくとも定家の時代にはすでに存在していたと知られる。また、本断簡は一面二四行もあるが、これは巻子本であるためで、こうなると為満の記した「此二牧」が「巻」である可能性が強くなるし、さらに進めて彼はこの定家筆本を転写したのではないかと想像されてくる。定家筆の巻子本による遍昭集は冷泉家に伝えられ、その後古筆の流行とともに裁断されて、今日ほとんど散逸してしまったのではないかと思う。

二 1—26 興風集 1

69・70

ふりはへて花見にくれはくらふ山
いとゝかすみのたちかくすらむ
吹風にとまりもあへすちる時は

やへ山吹の花もかひなし

「堺市宅藏春軒所藏品入札第二回」(大阪) 大正二年六月十四日

興風集の伝本は、(1) 正保版本歌仙家集本(五二首)、(2)

伝坊門局筆本(六六首)、(3) 西本願寺本(五七首)、(4) 部

類名家集切の大まかに四種に分けられる。そのうち伝坊門局筆本は

(1) の後に二首加え、さらに「二」として一首追補される。こ

の坊門局(生年未詳—一二〇〇)は俊成女で、定家の姉という関係

によるのか、現存本には定家の書入れがみられる。この伝本にさら

に九首加えたのが、私家集大成に1として翻刻される書院部本(五

〇・一一五)である。ところで、右の定家筆切は、伝坊門局筆よ

りもさらに九首増補された部分の、六九・七〇番歌に相当する。当

時、すでに伝坊門局筆の六六首本も、それと緊密な関係にあるさら

に九首を加えた七五首本も存在していたことになる。伝坊門局筆本

に定家の書き入れがあることから、彼は明らかに六六首本を見てい

るはずだが、それとはまた別の七五首本を写しているというのは、

両者どのような関連にあるのか、伝本の流布状況について興味ある点

だが、ここではその指摘にとどめておきたい。

三 1—57 賢之集 1

① 340—343

おなし六年春左衛門督殿屏風うた冬

おもひかねいもかりゆけは冬の夜の(頭部に「拾」)

河風さむみちとりなくなり

おなし八年八条の右大将本院の北方

七十賀せらるゝ時の屏風 春人の家

かはらすもゆる松かなむへしこそ

ひさしき事のためしなりけれ

ふちの花

なこりをは松にかけつゝもゝとせの

はるのみなとにさけるふちなみ

山さと

「繪墨城」

② 551—556

山かけにつくる山田のこかくれてほにいてぬ

もゆれともしるしたになきふしのねに

おもふ中をはたとへさらなん

たむけせぬわかれする身のわひしきは

人めをたひと思なりけり

なかり夜に思あかしてあさつゆの

おきてしくればそてそひちめる

たなはたに思ものからあふことのいつともしらぬ

我そわひしき

もゝはかはねかくしきもわかごとく

あしたわひしきかはまさらし

「かな古筆てかがみ」(66)・「てかどみ」(29)「なつやま」

(55)

③ 557—561

かさすともたちとたちにしなきなには

ことなしくさもかひやなからん
あふことのやまひこにしてそ ならは
人めもわれはよかすそあらまし
たなはたのとしに(不読)あふことは
人めに(不読)ありける

まこもかるよとのさは水あめふれは(頭部「古」)
つねよりことにまさるわかこひ

よそに見てかへるゆめたにあるものを
うつゝに人にわかれぬるかな

「古筆」(206)・「書道芸術」・(16—86)・「手鑑第三
集」(36)・「野辺のみどり」(25)

賀之集は今のところ右の三葉一五首を見いだすにすぎなく、いず
れも正保版本歌仙家集本と一致する。

四 1—104 惠慶集

①107

池の水

浪よするあしのうらはもとせぬは

池の水やとちてぬらむ

「書画美術品展観入札売立会」(大阪)昭和三十八年十二月五

日

②120・解題

としのをはりにこよみのちく

のもとまでまきよせたる心

人々よむに

まきよするこよみの心はつかしく
のこりのひゝにおい見えにけり

つこもりの夜としのゆきかふ

心人々よむに

ふるゆきにかすみあひてやいたるらん

としゆきちかふはるのおほそら

「吹原家所蔵品入札」(名古屋)大正十三年六月十七日・「北
勢某家当市某大家所蔵品売立」(名古屋)大正十五年十月十四

日

惠慶集には、およそ〔1〕古本系統(二九九首)と〔2〕定家
本系統(二九二首)の二種存し、大半の歌は重なりながらも、一
部の出入りが見られる。〔2〕は上下二冊で、定家筆本(上冊は冷泉
家蔵、下冊は越桐家蔵)が現存し、上冊は転写されて広く流布する。
〔1〕の本文は、書陵部本と関西大学本が伝えられるだけで、前者
には二首の脱落がある。さて、本断簡は、②の「ふるゆきに」の歌
が、〔1〕の書陵部本には欠けているものの、関西大学本および定
家系統本には存する。そうすると、今のところこの二葉からだけで
はいずれの系統ともと知ることができない。ただ、この切の存在に
よって、定家は〔2〕の定家筆本が存するほかに、さらにもう一本
惠慶集を書写していたことが知られる。

五 1—123 高光集

①10・11

たまふやかてやまとうた

ひとつそへてまいらせよと

おほせられしに

さくらはなのとけき春の雨にこそ

ふかきにほひもあらはれにけり

紅梅あはせ

うくひすのすをくひそむるむめの花

いろもにほひもをしくもあるかな

「海声館蔵品入札図録」(大阪)昭和十六年六月五日

② 12—14

北宮かくれたまひつころ

世のなかはかくこそ見ゆれ

つくつくとおもへはかりのやとり

なりけり

おほむさうそのうち

たのみこしときはのやまも

おほそらのかすみにかすむよに

こそありけれ

おなしころおほむふくにて

「思文閣墨蹟資料目録」第六十三号 昭和五十一年九月・「国

文学古筆入門」

③ 22・23

師の大納言のむすめ左衛門督

いかなりしおりにか

いふことのなひきかたさにしら

つゆの□□ゐてのみもあかしつるかな

にしの□□に(判読不能)

□かへり□□なにかきたる

としをへておもふ心のし□□□□

そら(判読不能)

「子爵丹羽家并ニ某家御蔵品入札」(東京)大正八年十月二十

日

④ 24

又これもおなし人に

かたときもわすれやはする

つらかりし心もさらに

たくひなければ

「某大家蔵品入札」(東京)昭和十四年六月九日

高光集は(1)西本願寺本(五二首)、(2)類従本(四三首)、

(3)正保版本歌仙家集本(四五首)の三系統存するが、(2)が

もとの姿で、あとは増補された伝本であろうか。定家筆は、本文か

らすると(1)と対立しており、後の二系統に属すると言えそうである。

定家が高光集を書写したとの記録はないが、定家筆伊勢集の巻末

に九首の高光歌を付加しているのを見ると、関係はなくてはな

だ、これはカタカナ書きで、またこの九首がどのような事情で添え

られたのかは不明である。

六 1—140 長能集 1

① 31—33

内わたりの人に

ありへてもあらずやなそと世中を

うくうきものとしりぬとならば
又

つらしとはしらぬにあらすしり
なから心にあらぬ心なりけり
いのちあらはあらはとおもひのはへつゝ、(ママ)
うきをもいたくのかへやはする

「古筆手鑑」(岡田家蔵)

② 49—51

うくはあらてつれなきことのそはさ
れはなそやわかみのおしからなくに

あめのいみしうふる夜□き

□のにてものいひあかしてつとめて
なかれあひてそこもしらすぬれたれは
のきのしづくにおほせてそくる

しつくおほみたちよるのきのかす

まさはそのぬれきぬをわれさへやきむ

③ 57—59

「因州池田侯爵家御蔵品入札」(東京) 大正八年六月

又女やいかゝいひたりけむ

思てふことこそいとゝうき人の
うきをしらするしるしなりけれ
やまひこの心をしはしのとめなむ
しての山ちをやすくゆくへく
かすかすにたのめしことをあめつちの

かみもきゝけむものにやはあらぬ
「世々の友」

④ 62・63

心ほそけなる山てらにこもり
たる人のもとにいきて返るとて
おほあらきのとほのゝほかにすむ人を
みすてゝゆけはそてそつゆけき

返し

かりにみるそてたにあるをおほ
あら木のもりのしつくはいふかたもなし

「井上子爵家並某家所蔵品入札」(東京) 昭和七年四月

⑤ 80・ナジ

はなおもしろきところに

さを山のたまをちかけにからにしき
おれるこすゑのうへのしらつゆ

大武のくたるに行(マ)岡に火つけたる

みてあれはなにそとゝへはかれをなむ

はたやくといふといひしかは

かたをかにはたやくをのこかのみゆる

みやまさくらはよきてはたやけ

「御子左手鑑」(静嘉堂文庫蔵)

⑥ 141・ナジ

いつこにかこまをとゝめむもみちはゝ
いろなる物は心なりけり
みつのもとのしらきくを

かけみれはあまつほしなりしかりとて

そのみくつをてらすとはなし

9 「ふるかゞみ」（二巻四号）

定家筆の長能集切については述べたことがある（「定家筆長能集」「日本古典文学会々報」第一〇四号）ので、ここではその概略を記すにとどめておく。長能集は（1）流布本（一四八首）と（2）異本（一二四首）に分けられ、前者は長能自身の未整理本系統、後者は後人の集成整理本系統とされる（「私家集大成」解題）。さて、右のように定家筆切を六葉一五首示し、一応流布本の番号を付したが、そこでは①など本文の違いが顕著であるほか、（ナシ）とする歌が二首存する。そのことは、この断簡が流布本ではないことを意味するし、一方②③④の断簡の歌は一首も異本には見えないため、その系統でもないことになる。さらに、右の三葉は流布本の配列順と一致するため、近い関係にあることを思わせるが、ところが⑥の「ふるかゞみ」所収切の二首になると、異本（Ⅱ）の六五・六六番歌と連続しており、どちらとも言えなくなる。

また⑤の「御子左手鑑」の模写の断簡は、一首目は異本（Ⅱ）の六九番歌、二首目は一二五番歌の「丹波のくたりに、かたをかに、火つけたるをみて、かれはなにそとへは、かれをなむはたやくとはいふといひしかは」と、詞書だけで歌を欠くのに相当する。この資料によって、長能集の新たな歌一首が復元できることになる。このように、定家筆切と現存する二本（流布本・異本）との関連を見ると、いずれとも重なることなく、本文も異なるなど、さらに第三の伝本を想定する必要がある。こ

へ付記Ⅴ以下の定家筆私家集切の考察は、「日本語・日本文化研究